

第2章 連立政権と入閣

### 細川政権と政治改革

——そして93年8月、いよいよ細川政権が発足しました。永田町の空気が大きく変わりました。

菅 細川政権の一翼を担ったさきがけと日本新党が一緒になった会派は、議員数は50人ほどでしたが、日本新党の議員が多かったのではとんどが1年生議員でした。そして国会が始まると、うちの会派からも国会の委員長を出さなければいけなくなりました。「さきがけ日本新党」には3ポストが割り振られて、その中に外務委員長も含まれていました。委員長というのは委員会の議事運営に責任をもつ重要なポストで、ある程度の経験が必要



発見されたエイズ・ファイルについて記者会見する（1996年2月）

なので普通は当選1回や2回の議員はやらない。それで5期生だった私に「外務委員長をやってくれないか」という話がきたわけです。さきがけ日本新党に回ってきた他の委員長ポストも比較的当選回数が多い人がやりました。あとは武村さんらが大臣として内閣に入ったりしました。ということで私は自社さ連立政権ができた後まで2年近く外務委員長をやっていました。

細川政権は政治改革を標榜した政権でしたが、とにかく不安定な政権で四六時中政局だったという印象があります。しかし、このころ菅さんの名前はあまりニュースに出ていませんね。

菅 それはそうでしょう。私は94年1月に正式にさきがけに入りましたが、いわば新参者でオリジナルメンバーではありませんから、党内では比較的地味なポストで活動していました。当時日本新党の代表幹事が荒井聡<sup>1</sup>さんでした。一方、さきがけはトップが武村さんで、園田博之<sup>2</sup>さん、田中秀征<sup>3</sup>さん、鳩山由紀夫<sup>4</sup>さんらが幹部でした。私は党内では土地税制問題などを担当したのが1つと、あとは当時、首相特別補佐だった田中秀征さんに首相官邸の部屋によく呼び出されるなど、田中さんの走り使いみたいなことをやったりしていました。という具合に細川政権の最初の半年ぐらいは、与党にはいたものの周辺事業みたいなことをやっていました。ですからこのころはまだ党の役職として他の党と協議すると

いうようなことはなかったですし、閣議とか重要政策や政局に関する官邸でのいろんなやりとりの場には加わる立場でもなかったのです。

衆院に小選挙区比例代表並立制を導入することが柱の政治改革が実現すれば政界再編につながることは自明の理でした。特に小選挙区制は少数政党にとっては不利な選挙制度です。菅さんはこの年、雑誌「世界」の12月号に政界再編像に関する論考を書いています。日本新党とさきがけ、社会党に自民党の一部を加えた「日本型民主党」と、新生党、公明党、それに自民党の一部を加えた「日本型共和党」、さらに自民党の残りの議員の政党による3大政党のイメージを描いています。そして「日本型民主党」の理念はリベラルだとしています。

菅 細川政権が誕生したあとで聞いた話なんですけど、田中さんが「政権には1つの使命が必要だ」と言っていて、細川政権を政治改革政権と位置づけるとともに、選挙制度改革につい

(1) (1946) 東大卒。農水省に入り横路孝弘知事の下で北海道庁勤務などを経て、93年に日本新党公認で衆院選に立候補し初当選。以後、当選4回。さきがけ、民主党に属した。07年に北海道知事選に立候補したが落選した。

(2) (1942) 日大卒。日魯漁業に19年間勤務し、86年に衆院選初当選。以後、当選7回。93年に自民党を離党し、新党さきがけ結党に参加。代表幹事を務めた。村山政権で内閣官房副長官。99年に自民党に復党し政調会長代理などを務めた。

ては小選挙区と比例区の定数を250と250で並立制とし、比例部分は全国1選挙区とする案を骨格にして、それを各党が受け入れる形で細川連立政権ができたというんですね。私自身は小選挙区制の導入には基本的に賛成でしたから、さきがけがそういう行動をとったことはいんじゃないかと思っていました。

雑誌「世界」の論文ですが、私は積極的に「3つの党を」と言ったことはないです。基本的に私は2大政党論です。ただ、再編の過程でいろんなことが起きるだろうとは思っていました。というのも小選挙区制というのは必然的に2大政党制につながっていきまさらね。当時議論になったのは、政権交代というダイナミズムを持つ選挙制度をとるのか、それとも国民世論を比例的に代表させるシステムをとるのかということですね。知事選だと選挙結果が49対51となった場合、51をとった人が当選するわけです。その結果、49は「死に票」かというところではなくて、あくまでも1人を選ぶというシステムにおいての49対51ですから、私は「死に票」という言葉はおかしいと思ってました。

そういうことを含めて、私は政権交代のダイナミズムを選ぶべきだと考えていました。中選挙区制の時代、社会党は定数の過半数の候補者を出したことがないんです。それじゃあ政権がとれるわけがないでしょう。その意味で私はかなり積極的な小選挙区導入論者でした。

——菅さんの論文でおもしろいのは、日本型共和党に新生党と公明党が入っていることです。細川政権で連立を組んでいた小沢さんの新生党は自分とは違うというイメージがあったんですか。

菅 当時、私は小沢さんをまったく知らないんですよ。個人的に言葉を交わしたことがあるかないかという程度でした。閣僚をやったことのある人でしたら予算委員会などいろんな委員会で私が質問することがあるんですけど、小沢さんは閣僚をほとんどやってないものですからそういう機会もなかった。それはともかく小沢さんの新生党が自分とは別の党の側であると書いたのは、小沢さんとさきがけのいろんな確執を見たり感じたりしていたためかもしれませんね。

——もっと興味があるのは公明党です。公明党の政策は昔から弱者救済、福祉政策重視であり、自民党に対しては野党的スタンスをとってきたわけですが、菅さんはリベラル勢力に入れてないですね。

菅 公明党という政党そのものが異質なんですよ。1つの宗教団体がつくった政党ですからね。政党と宗教はもともと原理が違うわけですよ。宗教では教祖が絶対ですが、民主主義国家における政党というのは、民主的なものごとの決め方が必要なので、その点でも異質なわけですよ。とにかく私は公明党に対しては異質という意識が強いですね。その感

じは今日に至るまで変わらないですね。

——あんまり好きじゃないんですか。

菅 存在そのものが本質的に矛盾している政党だと思っています。宗教の原理は、教祖であるか何であるかは別にして、そこで精神的に一体になる。一方、政治は小沢代表を信奉する人であろうが他の人を信奉する人であろうが、一種の民主主義的手続きの中で物事を決めていく。民主主義的な手続きで決めるルールの政党と、民主主義的手続きとはまったく別の次元で帰依する宗教とは、組織原理そのものがまったく違うと思います。もちろん社会的存在としては両方あっていいんです。しかし、民主主義的ルールとまったく関係ない形で存在する宗教が丸ごと1つの政党をつくれれば、矛盾するのが当たり前ですね。

——そこまでおっしゃるといことは、仮に今後、公明党が自民党との連立を解消しても、民主党は公明党とはなかなか手を握れないということですか。

菅 まあ、そこは政治の問題であってわからないですよ。私が言いたいことは公明党という政党が質的に異質だということですよ。

——政策の面から見れば、自民党よりも公明党のほうが民主党に近いと思いますか。

菅 確かに政策的には似てるんです。しかし、民主主義社会における政党のあり方としては異質ですよ。

——政治改革実現のために細川政権は最大限のエネルギーを使いました。

菅 選挙制度の改正案を含む政治改革関連法案は衆議院で可決されたものの、94年1月21日、参議院本会議で否決されました。それを受けて両院協議会が開かれるなどの調整が進みました。最後は、細川首相と自民党の河野洋平総裁のトップ会談で合意が成立し、自民党も賛成する形で修正案が衆院に戻されてきたわけです。そのとき小選挙区と比例代表の定数配分が当初の250対250から300対200に変わり、かつ比例の200の選挙区が全国1本じゃなくて、11のブロックに分かれたわけです。田中さんは「あれが間違いだった。全国1ブロック制だったらより質の高い政治家が生き残ることができたが、小さく分かれたことで比例区は小さな政党や個人の力ではなかなか当選できなくなった」と言うんです。私は田中さんのこの言葉が非常に印象に残っています。

ちよっと話が前後しますが、社会党は93年の総選挙を山花貞夫委員長のもとで大敗したわけですが、大敗した委員長がそのまま残って、しかも細川政権で政治改革担当大臣に就任してまとめ上げるわけですね。社会党という政党は主体的に政権をとろうとはまったくしなかったし、できなかった。その政党が政権与党になって、それまで最も強く反対していた小選挙区制を導入する政治改革の担当大臣を出したわけです。そして、山花さんは国会審議ではあらゆる質問に耐えに耐えた。しかも、最後の採決では社会党内から造反議員

が出た。これはもう社会党の断末魔の状態ですね。それを私は横で見っていました。

### 細川首相の退陣

——難産の末とはいえ、政治改革関連法は94年1月29日に何とか成立しました。にもかかわらず細川政権は安定するどころかますます混乱しました。

菅 政治改革関連法が成立した直後、田中秀征さんは細川首相に会って、「細川政権は政治改革特命政権です。選挙制度改革ができたんだから、これで総理を辞めましょう」と言った。だけど細川さんは「うん」と言わなかったそうです。もちろん常識的にいえば「うん」とは言わないですよ。それで田中さんは首相特別補佐を辞めました。

政治改革関連法が成立した直後の2月3日未明、突然の記者会見で細川首相が国民福祉税をぶち上げた。そのころは官房長官だった武村正義さんと小沢一郎さんの確執が激しかった。もちろん私はさきがけにいますから武村さんを支える側ですが、政権内がガタガタしているのをひしひしと感じていました。あの記者会見に武村さんは同席しませんでした。武村さんは後で国民福祉税について「自分は一切聞いてなかった」と話していました。そして、会見の中での「腰だめ」という言葉が問題になって、細川首相はあっさりこの構想を撤回してしまった。そのあと細川首相自身の佐川急使問題などが表面化して、退陣し

てしまうわけですね。

——政権中枢が大混乱してきたとき、菅さんはどうしていたのですか。

菅 私は官邸の中にいませんでしたから、情報はワンクッション置いて届いていました。それでも、細川政権が次第に弱っているという感じが伝わってきました。細川政権発足当初、さきがけと日本新党は統一会派をつくり、やがては1つの政党に合併しようと思っていました。ところが合併がだんだん難しくなってくるわけです。もともとさきがけと日本新党の関係は、いびつだったんです。日本新党のほうが議員の数が多いうえに首相を出している。一方のさきがけは議員数が少ない。しかし、中堅やベテラン議員が多い。だから、小さいほうのさきがけが兄貴のように振る舞うのです。そのため日本新党の中から、なんで小さいさきがけが会派の代表を出すなどリーダーシップを握るんだという空気が出てきたわけです。

細川さんが首相を辞めるとさきがけが事実上連立政権を離脱して、日本新党との統一会

(3) 94年2月3日未明の記者会見で細川首相が突然発表した新税構想。税率3%の消費税率に代わる7%の新税で、福祉目的に充てるとした。細川首相が与党内調整を経ずに発表したうえ、税率の根拠について「腰だめの数字」などあいまいな説明をしたため、世論の強い反発を受けた。与党内からも「過ちを改めるにしくはなし」(武村官房長官)などと反発が出たため、細川首相は5日後に撤回した。

派も解消されたので合併話も消えました。さきがけは自分たちがつくった予算は成立させなければならぬと考え、また、首相指名選挙では新生党の羽田孜さんに投じましたけど、「連立には入らない」ということを宣言しました。

#### 村山政権誕生の舞台裏

——羽田政権でさきがけは社会党とともに連立政権を出て、閣外協力となりました。

菅 正確に言うところには時間の差があるんです。先にさきがけが閣外協力を言って首相指名で投票したわけです。しかし、社会党は連立政権の枠内で投票した。当然閣僚を出すつもりだった。したら社会党以外の政党がひそかに「改新」という統一会派をつくるという話を進めていたわけです。それで社会党の村山富市委員長が「そんな話は聞いてない」と怒った。まだ組閣が終わっていない段階でしたから、社会党は「閣僚を出さない。閣外に出る」ということになってしまった。その結果、連立与党は議員数だけでいうと衆院の過半数を割ったわけです。つまり、羽田政権は少数与党政権として発足したのです。簡単に言うとききがけの中はアンチ小沢の空気が強くて、一歩先に与党から飛び出した。そのあと社会党が閣外に出た。その結果、羽田政権は短命で終わることになったわけです。

羽田政権の最後の段階でさきがけは自民党が提出した内閣不信任決議案に賛成するとい

うところまでは決めていなかったんですが、羽田政権は行き詰まっていたから、不信任案の採決前に総辞職しましたね。

——そして、首相の指名投票になって、元首相の海部俊樹さんと社会党委員長の村山富市さんの争いになりました。

菅 あのときは私も田中秀征さんの指示を受けてずいぶん動きました。戦略は非常にはつきりしてました。数を見ればわかるわけですが、さきがけだけだとどうにもならないのですが、社会党とさきがけを足すと、キャスティングボートを握ることができる数字になったわけです。つまりさきがけと社会党が一緒になると、自民党と組んでも過半数、旧連立と組んでも過半数になるのです。この状況は、93年の細川政権をつくるときのさきがけと日本新党が置かれた立場と同じです。

そして、社会党の幹部がポロツと「羽田さんのあとの政権は、きちつとした政権構想が必要だ」と言ったのです。その瞬間に田中秀征さんが「そのとおりだ。まずは社会党から政権構想を出してくれ。そのときは社会党から首相を出す覚悟でやってくれ」と詰め寄っ

(4) 94年4月、羽田孜氏が首相に指名された直後に新生党、日本新党、民社党などが結成した衆院の院内会派。社会党をはずして秘密裏に進められたため、反発した社会党が連立与党を離脱。このため羽田政権は少数与党としてスタートし短命に終わった。

たのです。

永田町では「武村さんが首相の座を狙っているのだらう」などというわさなさんが出ました。当時、さきがけは田中さんが中心になって戦略を議論していましたが、田中さんの判断は「ここで武村さんを首相にすることは無理だ。社会党の党首を首相にするしかない」と言っていました。つまり最初に「社会党から首相を」と言い出したのは田中秀征さんだったのです。社会党もやる気がありそうなことを言い出したので、「社会党から出す覚悟で言ってるんでしょね」と逆に本気で詰め寄ったわけです。

そして、さきがけと社会党とのあいだで政権協議が始まりました。さきがけの政調会長は私で、社会党は政審会長の関山信之さんでした。私と関山さんで次の政権構想の案をつくったんです。その中身は今でも立派なものだと自分では思っています。例えば国の仕事を知事や市町村長に委任している「機関委任事務」の廃止なんかが入っていますよ。そして、両党党首の村山富市さんと武村さんの名前で合意文書を作成し、それを自民党と当時の連立与党の両方に掲示して「この政権構想に従って、かつ社会党の村山委員長を首相とすることによってやっていただけるのであるならば、連立政権を組みます」と言ったわけです。自民党は河野洋平さんが総裁で橋本龍太郎さんが政調会長です。政権構想を橋本さんが見て「多少の問題はあるけど、まあいいかな」とか言って、一瞬にして丸のみするわけです。

それに対して旧連立の側は、民社党とか公明党が「この案に乗ればいいじゃないか」と言ったのに、小沢さんがあれこれ難色を示した。実はこのとき小沢さんは別の工作をしていたわけですね。それが海部俊樹元首相の擁立劇です。海部さんを擁立することで、首相指名投票で社会党の一部が割れると思っていたわけですね。

——あの当時、だれもが社会党と自民党が連立を組むなんて思っていなかったですからね。菅　　そうですね。そして、小沢さんは仮に自民党と社会党が組んでも、社会党が割れると思っていた。特にあのときはややこしいことに社会党の左派が自民党と組むことに積極的でしたが、久保亘さんたち右派が旧連立に戻るべきだと主張していた。だから社会党が割れると思っていたわけですが、それが読み間違いだった。

例えば首相指名選挙で自民党の河野洋平氏を選ぶのか旧連立の羽田孜さんを選ぶのかと

(5) (1934) 新潟県・三条高卒。新潟県議会議員などを経て83年に衆院選初当選。以後、当選4回。党政審会長などを務めた。

(6) 主な柱は「政治改革の継続的推進」「行政改革と地方分権の推進」「公共投資基本計画の再検討など経済改革の推進」「戦後50年と国際平和」「北朝鮮の核開発への対応」など10項目。戦後50年については「過去の戦争を反省し、未来の平和への決意を表明する国会決議の採択などに積極的に取り組む」としている。

(7) (1929) 2003 陸軍予科士官学校中退、広島文理科大卒。鹿児島県立高校教諭、鹿児島県高教組書記長、鹿児島県議などを経て74年に社会党から参院選初当選。以後、当選4回。副委員長、書記長などを務め、橋本内閣で副総理・蔵相。その後、民主党に移り参院議員会長を務めた。

いうのだったら、社会党は割れた可能性がある。しかし、社会党委員長の村山さんを選ぶのか、自民党から飛び出した元首相の海部さんを選ぶのかということになったわけですから、社会党が割れるわけがないでしょう。自民党と組むことにいくら不満があっても、投票は自分の党の委員長の名前を書くわけですからね。社会党には組織政党というDNAがある。結局、「村山」と書かないで「海部」と書いた社会党議員は少なかった。

私は田中秀征さんの仕掛けが効を奏して村山首相が誕生したのだと思っています。自民党と一緒になるという問題はあったのですが、それ以上に村山さんを首相候補にするという戦略によって、社会党は割れず村山政権ができたわけです。関山さんは私と一緒に政権構想の案をつくったんですが、彼は党内では右派でしたから、実は首相指名で村山さんに入れてないんですよ。(笑い)

——自民党は何としても与党復帰を果たそうとして、細川政権末期あたりから、森喜朗さんや亀井静香さんらが中心になって社会党と接触し、村山さんを擁立して自社連立政権を実現しようと動いていました。一方で田中さんが村山首相実現で動いていたのであれば、田中さんと自民党がどこかでつながった可能性があるんですか。

菅 村山首相誕生に向けて亀井さんらがあやつた、こうやつたという話は、あとになってたくさん出てきました。確かにそうした動きがあったんでしょう。ただ、新しい首相を

つくるとか連立をつくるためには一種の大義名分が必要なわけです。特にさきだけはそれを大事にしました。細川政権をつくるときには政治改革という大きな目標があるから、社会党から新生党まで個別に政策を見ればバラバラだけど、とにかく政治改革をやるための政権なんだということで政策の矛盾には目をつぶって大義名分、筋論で行くことにしたわけです。次の政権づくりの過程も一緒です。ですから一般論として首相には村山さんがいいというんじゃないで、「われわれと合意できる政権政策に基づいて政権をつくるのなら村山首相でいいですよ」という大義名分を立てたわけです。

——政権づくりには大義名分が必要だというのはわかります。しかし、現実には自民党と社会党の一部の人たちが水面下で連立に向けて動いていたわけでしょう。

菅 それは私からは一切見えませんでした。田中秀征さんについて言えば、彼の性格からしてそういう動きはしていなかったと思いますよ。武村さんはもうちょっとふところが深いというか(笑い)、自民党と接触していたかもしれないませんが、私にはちよつとわかりま

(8) 第1回投票で村山氏が241票、海部氏が220票を獲得したが、いずれも過半数に達しなかったため決選投票となり、村山氏が261票、海部氏が214票で、村山氏が第81代の首相に指名された。自民党と社会党は村山氏支持を決めたが、第1回投票では自民党から26人、社会党から8人が、第2回でもそれぞれ19人、8人が海部氏に投じるなどの造反議員が出た。

せん。ただ、武村さんは後藤田正晴さんとは近かったけど、亀井さんとはあまり近い感じがしないですね。

とにかく自社さ連立政権はできました。それが実現したもう1つの背景は、あるとき社会党は完全に2つに割れていたんですよ。つまり、意思決定が2つになっていた。1つは久保亘さんがリーダーで関山さんもいた。もう一方は村山さんがリーダーで村山政権で官房長官を務めた野坂浩賢さんがいました。2つに割れていたから、おもしろい場面がありました。例えば、われわれが社会党と協議しようとする時、当時、久保さんが書記長で野坂さんは国対委員長だったと思いますが、必ず2人が一緒にくるのです。そして、協議の前に野坂さんが「久保さんと一緒に行くが、協議の席ではこういう方向で話しましょう」というような連絡をしてくるのです。つまり野坂さんが社会党全体を自分の思う方向に引っ張っていったわけです。一方の久保さんは小沢さんたちと同じ方向を目指していると言われていた。しかし、野坂さんは絶対にそっちに行きたくないわけです。

そんなときに総辞職したばかりの羽田さんがもう1回首相をやるというような報道が出た。すると野坂さんは「首相を辞めた人が、またやるなんてことはあり得ない」と言い切って流れをつくっていくわけですよ。

菅さんの説明だと、さきがけは社会党内の2つのベクトルのバランスの中にいたわけですね。

菅 自民党は「自社さ政権は自分たちが動いて実現した」と言っているけど、私から見るとそれは違う。社会党という政党は自民党のように政権のためなら何でもOKという政党ではない。大義名分や手続上の正当性がなくなかなか動かないのです。だから、さきがけと社会党が政権合意をするというプロセスがなければ、社会党は首相指名の段階で間違いなく割れています。社会党とさきがけの政権合意があつて初めて社会党も正規の手続きをとった。右派も左派もあわせてとった。次にその両党の政権合意を自民党と旧連立に示してどちらがのむかという手続きに入った。そのプロセスがあつたから社会党が大きくは割れないで自社さ政権になっていくんです。いくら自民党の人が「俺たちがやった」と言っても、半分それも正しいかもしれないけど、首相の指名で社会党が大きく割れていたなら、たぶん小沢さんの推す海部さんが勝っていたでしょうね。

——自社さ政権実現の過程も、さきがけの側から見ると自民党史観とはずいぶん違うものですね。

(9) (19242004) 法政大卒。日通社員、鳥取県議などを経て72年に社会党から衆院選初当選。以後、当選7回。国会対策委員長などを務め自民党議員にも人脈を持った。村山内閣で建設相、官房長官。村山首相の側近で、自社さ連立政権を実現したキーマンの1人。

菅 あのとときの政局をわかりやすく言えば、小沢さんと田中秀征さんが戦っていたんですよ。そして、村山さんを首相候補にしたから自社側が勝ったんです。社会党議員の中には白票を投じたり海部さんに入れた人もいましたが、自民党にも元首相の中曽根康弘さんまでが1回目は欠席し2回目は海部さんに投票したんですよ。つまり、中曽根さんが自民党に造反したんです。(笑い)

——首相指名の本会議が開かれる日の夕方、中曽根さんは記者会見して「社会党委員長に投票したくない」と言いました。

菅 あの記者会見があったので、社会党は逆に村山さんに固まったんです。造反しにくいムードになった。

——それにしても、社会党はよく自民党との連立に踏み切りましたね。

菅 村山さんを首相候補にしようなんてことは、社会党内では最初だれも言わなかったんです。そういう発想がない政党なんです。

社会党は自民党と組まないという決議を、直前の大会か何かの会議で決めているんです。ところが現実には首相指名で村山さんが首相に選ばれた。社会党は自民党と組まないという決定が残っているから、与党3党の党首会談がなかなかできないんですよ。首相指名後の両院議員総会か何かで、久保さんは「少数与党になった」と言ったんです。つまり、自

民党が勝手に村山さんに投票したというのが社会党の言い分なんです。社会党とさきがけは政策協定を結んでいます。首相指名前に自民党も加えた3党での協定を結ぼうと思っても、社会党は自民党とのあいだで協定を結べなかったわけですね。だから首相指名後、ちよつとあとになってからの3党合意になるんです。もちろん自民党はわれわれの合意をそのまま丸のみしたんですが、首相指名前の3党合意ではないんです。久保さんは「あくまでわが党の党首を首相指名するんだ。自民党は勝手に票を入れてくれたんだ。自民党と一緒にやるなんて決まっていんだ」と言っていました。そして、一時は自民党との連立をするためには党大会を開かなければならないというような意見まで出たんですよ。

社会党議員らは首相指名の日の夕方、みんな「勝った、勝った。飲みに行こう」なんてやっていました。しかし夜が更けても3党首会談が始まらないんですよ。それで私は知り合いの社会党代議士に片っ端から電話して「おい、どこにいるんだ。みんな国会に戻って来い。今が大事だ。明日の朝までに3党首会談ができなかったら、村山政権は離陸前に墜に激突だ」と言った。確か3党首会談は夜中の2時ごろにやっと始まるんですよ。

(10) 首相指名のための衆院本会議が開かれる直前、中曽根氏は国会内で記者会見し、自民党が社会党の村山富市委員長への投票を党議決定したことについて、「社会党委員長に投票することは、国益に反する挑発的な行動だ。私は、保守・中道路線を唱えてきた。日本の運命を守るために海部俊樹氏を支持する」と述べた。

薄氷を踏む思いで誕生した政権だったわけですね。もしも、自社さ政権ができていなかったらどうなっていたのでしょうか。

菅 私は関山さんと協議しているときに、社会党と連立を組むことはいいが、もしも旧連立が戻ってきたら、小沢さんの頭を押さえ込んで村山さんと武村さん、つまり社会党とさきがけがイニシアチブを握った村山政権をつくればいいと思っていました。小沢さんにとっては多分それがいちばんいやだったでしょう。政権に武村さんが帰ってくるのがいやだったんですよ。村山さんがいやというのではなくて、武村さんが戻ってきてデカイ顔をされるのがいやだったんです。それで村山擁立に乗らなかつたんです。

後に私は武村さんに「旧連立側が村山擁立を受け入れたらどうするつもりだったんですか」と聞いたことがあります。武村さんはムニャムニャと言うだけではつきりしたことを言わなかつた（笑い）。武村さんも小沢さんともう一回一緒にやるといふことはいやだったのかもしれないね。

#### 村山政権の運営

村山政権のもと、自民党は社会党やさきがけに対して腰を低くして政権運営をしました。細川政権での小沢氏のやり方が失敗するのを見ていたためでしょうね。政策決定のあ

り方では3党で政策調整会議とか責任者会議などをつくった。そして、いずれの会議も自民党が過半数を超えないような構成にした。その結果、さきがけは国会議員数以上の力を持つことになりました。

菅 村山政権がスタートからうまく動いたのは、村山、河野、武村の3人の党首の信頼関係があったからなんです。自民党の総裁がハト派の河野さんだったというのはかなり大きい要素ですね。河野さんは自民党の中でもリベラルな路線の人で、武村さんや村山さんとの関係がもとよかつたですからね。

細川政権では小沢一郎さんや公明党の市川雄一書記長<sup>11</sup>、民社党の米沢隆書記長<sup>12</sup>が中心に政権を運営したため、この人たちの名前から「一・一ライン」とか「一・一・米（ワン・ワン・ライス）」とか言われていました。そして、小沢さんの強引なやり方にみんなが反発していました。だから村山政権では民主的にやることに気を遣いましたね。自民党は幹事長が森喜朗さんで政調会長が加藤紘一さんでした。私は加藤紘一さんとは以前から多少

(11) (1935) 早大卒。創価学会参謀室長などを経て、76年に公明党から衆院選初当選。以後、当選9回。公明党国会対策委員長、書記長などを務め、細川政権では小沢一郎氏らとともに政権中枢を担った。

(12) (1940) 京大卒。旭化成社員、宮崎県議などを経て、76年に民社党から衆院選初当選。民社党書記長などを経て94年に民社党委員長。その後、新進党結党に参加し幹事長などを務めた。

お付き合いがあったので、それまで政調会長だった橋本龍太郎さんが入閣されたあと、いい人が政調会長になったなと思っていました。そして社会党は関山信之さんが政審会長を続けました。政策調整の実務は私を含むこの3人の政調会長がうまく機能したと思います。政策調整会議は、その下にテーマごとにPT（プロジェクトチーム）を約20つくりました。構成は自民党が3、社会党が2、さきがけが1という比率でした。自民党が過半数にならないような配分です。

ところが議員数の少ないさきがけにとっては1つのPTに1人議員を出すのがやっとだったんです。さきがけからは大蔵大臣と厚生大臣を出していました。だから党のほうの政策は、私が政調会長で真ん中において、1年生議員を含めて1人ずつプロジェクトチームを割り振ったんです。当時、PTに入って議論した議員にとってはすごく勉強になったと思います。前原誠司<sup>13</sup>君なんかもそのときはさきがけにいて安全保障政策の分野を担当していました。相手が自民党の山崎拓さんですよ。また千葉県の知事になっている堂本暁子<sup>14</sup>さんも環境政策の部門で水俣病問題を一生懸命やっていました。PTには自民党からはかなりの大物議員が出てくることもありましたが、こちらは大半が1年生とか2年生議員です。からね。そしてPTで固まった政策が政策調整会議に上がり、そこでまとまったものを幹事長や書記長で構成する与党責任者会議に上げて決めていったのです。

——手順を大事にした手法ですね。

菅 そうです。責任者会議には、政策調整会議で合意したものを上げていたんです。細川連立政権では、新生党の小沢さんから幹事長・書記長でつくる代表者会議が実権を握って重要なことはほとんどそこで決めていました。自社さ連立政権はボトムアップ方式で、まずPTという現場で協議し、さらに政策調整会議で話し合いました。より上の政治判断を求めるときは、それまでにほぼ決まったものを与党責任者会議に上げていました。現場レベルでなかなか決まらないものは何度もPTと政策調整会議で協議しました。これはやりがいもありましたけどなかなか大変でした。政策調整会議には予算編成から法案までありとあらゆる問題が持ち込まれてきましたからね。

私の記憶に残っているのは、さきほど触れました水俣病の未認定患者の救済問題ですね。この問題に対して環境庁は当初、非常に厳しい姿勢で「一時金は一切出さない」と言うわけです。一方、社会党は「出すべきだ」と主張する。さきがけのキャップの堂本さんが環

(13) (1962) 京大卒。松下政経塾、京都府議を経て93年に日本新党公認で衆院選初当選。以後、当選5回。新党さきがけ、民主党に移り、05年9月、民主党代表に就任したが、「偽メール」事件の責任をとって翌年4月に代表を辞任した。民主党内では安全保障政策の第一人者。

(14) (1932) 東京女子大卒。TBS記者、89年に社会党から参院選初当選。以後、当選2回。新党さきがけに移り、議員団座長などを務めた。01年に千葉県知事に当選。

境庁を押さえ込んで、なんとかまとまりました。

P Tの議員数は3・2・1ですが、議長役は2カ月交代の当番制にしました。さきがけから出ている議員も当番になるとまとめ役を務めなければならぬのです。全体をまとめる政策調整会議も同じです。結局、加藤さんや関山さんと私の3人の信頼関係がうまくいったのと、党首間の信頼関係があったのでいろんな問題を決着させることができたと思います。

——自民党の長期政権時代に先送りされ続けた問題、特に社会党が長年にわたって熱心に主張していた問題が動きましたね。水俣病未認定患者問題もそうですが、被爆者援護法<sup>16</sup>、あるいはさきがけが強く主張していた政府系金融機関の統廃合<sup>17</sup>といった問題です。これは議員数に比例しない影響力を社会党とさきがけが持った結果だと思っています。

菅 私は当選1回目から社会労働委員会にいましたから、被爆者援護法については年中行事のようにかかわっていました。社会党など野党側が国家補償などを要求し、与党側は条件をちよつと上げる案を出して、結局与党側の案で落ち着くということをやってきました。そして、村山政権で初めて連立与党が被爆者援護法案を合意し、94年12月に成立しました。法案には社会党の主張が大筋で取り入れられ、原爆投下時の即死者にまでさかのぼって被爆者の遺族に「特別葬祭給付金」が支給されることになった。

政府系金融機関の問題はどちらかというときつい思い出になっています。さきがけは政府系金融機関だけではなく特殊法人全体について大改革案を出したんです。つまり92の特殊法人すべての廃止案を出したんです。日経新聞が大きく取り上げてくれました。しかし、結局は10いくつしか手をつけることができなかつた。「全部やると言ったのに、わずか10いくつしかできなかつたじゃないか」と言われたんです。政府系金融機関も同じで、日本開発銀行、日本輸出入銀行<sup>19</sup>、そして北海道東北開発公庫<sup>20</sup>の統合案を提案したが、関係省庁の抵抗が強くてなかなかうまくいかなかった。最後のところで自民党政調会長の加藤紘一さんらが、いちばん大きい開銀と輪銀の合併案を急に言い出した。私は「この案に乗って

(15) 村山政権時代の95年6月、与党3党が政治決着させることで合意、その後協議を続けて同年12月、一律260万円の一時金と団体加算金を支払うことで患者団体と合意し決着した。

(16) やはり村山政権時代の94年10月に与党3党が合意し、12月に成立した。被爆直後の死没者にさかのぼって遺族に1人10万円の特別葬祭給付金を支給することが柱。社会党は70年代から同趣旨の法案を国会に提出し続けていたが廃案を繰り返していた。社会党の村山委員長が首相に就任したことで実現した。

(17) 村山政権が取り組んだ行政改革の1つで、自民党も大胆な改革を主張していたが大蔵省が抵抗したため、中途半端な形で終わった。95年3月に与党3党が合意した内容の主な柱は、日本輸出入銀行と海外経済協力基金を統合する、日本開発銀行は業務の一部を削減する、など。

(18) 国民的経済に有益だが、投資回収に長期間を要したり収益性が低かつたり、リスクが高いプロジェクトに長期で低利の融資をする金融機関。51年設立。99年に北海道東北開発公庫とともに日本政策投資銀行に移った。

「しまえばいい」と言っただけですが、さきがけは乗れなかったんですよ。というのも大蔵大臣が武村さんだったので、抵抗勢力側である役所に少し取り込まれたのかもしれない。これは苦い経験ですが、それでもだいぶ頑張ったんです。全体として自社さ政権は改革の発想がかなり強い政権だった。

——自民党の議席は二百数十で、さきがけは20議席前後。10倍以上の開きがあるのに、政策決定過程では自民3で、さきがけ1と、3分の1です。ですから、さきがけは議席数以上の影響力を持っていたことになりました。自社さ政権が誕生してからある時期まで自民党は腰を低くしていたけれども、彼らの要求がなかなか通らないため次第に「さきがけが大きな顔をしている。あんなに威張らせておいていいのか」という不満が出ていましたね。菅 そんな空気は自民党の中にあつたでしょうね。私の相手は政調会長の加藤さんで、党内をよく抑えてましたよ。だから私への批判などはあまりなかったです。そもそも、自社さ政権はさきがけがなかったら、社会党と自民党がダイレクトにくつつくことになりましたから実現不可能だったんです。社会党にすれば、さきがけなしでは自民党と政権をつくることはしんどかったでしょう。また、さきがけは単なる触媒じゃなくて、政権合意を3党間でつくることを進めた経緯がありますからね。数でいうと社会党と自民党だけで過半数なんです。しかし、一連の経緯の中で、さきがけが存在しなければ自社さ政権は誕生し

てなかったでしょうね。数の比率からいえばさきがけは大きな顔になっていましたが、われわれから言えば「3党の政権合意に基づいてやりましょう」という姿勢ですから、逆に言うと「当たり前だ」ぐらいに思っていましたね。

——自社さ政権のときの政策決定のシステムは、連立政権として非常に理想的なあり方だと思います。ただ、政府と与党の関係でいえば、明らかに与党主導ですよ。本来、政府が政策を企画立案して与党はそれを支持するというのが議院内閣制ではないですか。

菅 いや、その議院内閣制の理解はちよつと違いますね。まず、政府という言葉が間違いないですよ。行政権を持っているのは「政府」ではなくて「内閣」です。「政府」という言葉が憲法に書いてあるのは前文だけで、本文には「政府」という言葉が出てこないんです。すべて「内閣」なんです。そこが実はものすごく重要なんです。内閣は総理大臣と大臣で構成されますから、「政」と「官」でいえば「政」なんです。そして「議院内閣制」

(19) 輸出入金融、海外投資金融、途上国への資金協力などを担当している全額政府出資の特殊法人。50年に「日本輸出銀行」として発足した(52年に「日本輸出入銀行」と改称)。99年に海外経済協力基金とともに統合され国際協力銀行となった。国際協力銀行は08年10月に国民生活金融公庫など他の3つの政府系金融機関とともに統合されて日本政策金融公庫となる。

(20) 56年に設立された特殊法人で、北海道や東北地方のインフラ整備のために資金供給を行うことが目的。99年に日本政策投資銀行に統合された。

という言葉もわかりにくい。「議院」とは衆議院と参議院のこと、つまり国会のことなんです。だから本来は「国会内閣制」と呼ぶべきです。「国会内閣制」ならば国会が内閣総理大臣を決める制度である意味がはつきりする。国会の多数派である与党が内閣総理大臣を決め、その総理大臣が内閣をつくるのだから「内閣と与党が一体」というのは当然です。このことは小沢さんも言っていますが、私もそう考えています。そこはアメリカの大統領制とは違うんです。

それから三権分立という考えもしばしば間違って理解されています。国会と内閣を同等と理解するのは間違いです。総理大臣を選出する国会が総理大臣がつくる内閣と同等なんてことはあり得ないじゃないですか。民主主義のもとでは主権は国民にあり、その国民が直接選んだ国会が「国権の最高機関」であることは当然で、憲法も認めている。私はときどき学生さんに「国会議員の第1の機能は何ですか?」と聞くと、大体みんな「立法です」と言っています。私は「その答えは50点だ」と言っています。国会議員の第1の役目は総理大臣を選ぶことです。アメリカの大統領を選ぶ選挙人と同じように、国民を代表して総理大臣を選ぶのが国会議員です。特に衆議院議員はそうです。

ところが三権分立を言ったとたんに、官僚は「俺たちが行政権を持っている」と言うんです。しかし、憲法には「官僚が行政権を持っている」なんて一言も書いてない。内閣が行政権を持っているんです。

今の日本のような官僚主権国家というのは、憲法の間違った理解と運用によって成り立っているんです。大臣になった政治家が内閣に入ったとたんに「私は行政の立場だから、立法府のことには言及しません」などと言って自分から壁をつくるでしょう。これは役人による一種のマインドコントロールなんです。そして国会議員には「立法府が行政に対して予算などいろいろな注文をつけるのはわかりますが、それ以上言われるのは三権分立に違反しています」とも言う。

私は与党の一員だったとき、国会に行政監視のための第三者機関である行政監視調査会をつくらうとした。すると総務庁が反対するビラをつくって自民党などに配った。その内容は「行政行為に影響するようなことまで立法府がやるのは憲法違反だ」というものでした。そこで私は「そんなことを憲法のどこに書いてあるんだ。書いてないじゃないか」と言って大論争をやったことがあるんです。

私が言った方向を小泉首相がかなり実践しましたね。そして今、自民党では与党と内閣の一体性が出てきています。中身は私のイメージと違うところがありますが、形は私が言ったことにやや似ています。

だから私は与党主導で政策を決めていくことが間違っているとは、まったく思っていない

せん。逆に当たり前だと思う。連立政権のよさは、最初に政権合意があるため官僚主導の政策形成をかなり打ち破ることができたことですよ。それまでは官僚と議員で利害調整をして、与党の調整は役所別の族議員と地域別のぶんどり合いをやっていました。ですから日本には一体感のある政府というのがないわけです。つまり役所ごとに内閣があり、役所ごとに政府があつて、内閣というのは役所の代表が集まる単なる調整機関になってしまふんです。だけど、本来、内閣というのは国の行政全体に責任を持つチームであつて、憲法上、大臣はみんな国務大臣であつて、大蔵大臣や厚生大臣ではないんです。つまり首相はまず国務大臣を任命して、そのあとそれぞれに「この分野を担当してください」と言つて担当する役所を決める。だから基本的には大臣というのは国務大臣であつて国務全体を担っているわけですから、たとえば厚生大臣が防衛庁の予算について意見を言つてもかまわない。実は私はこのことは厚生大臣を辞めたあとで知ったんですが、もうちょっと早くわかつていれば、閣議でいろんなことが発言できたと思つたんですけどね。

——PTに始まり政策調整会議、責任者会議に至る与党の政策決定のプロセスと、菅さんの言葉で言えば与党が内閣に送り込んでいる与党の代表者たちとの間は、どのように調整しているのですか。

菅 与党と内閣の合同会議はいろいろありました。そして政府与党首脳会議で全体の話は話し合っていましたね。個別の政策については、各PTに関係省庁から説明にきますし、必要に応じて大臣とも相談したりしています。私がイメージするイギリス型システムは政調会長のような与党の幹部までが内閣に入っているのですが、自社さ政権ではそこまでは行きませんでした。そういう意味では自民政権のもとでの部会と内閣の各大臣の関係は、自社さ政権でのPTと内閣との関係と形式的には似ているかもしれませんが、自社さ連立政権では政策をつくる力がある程度は与党が持つていて、かなりの調整をやつたという点では異なっていますね。

——村山政権では水俣病問題や被爆者援護法については、与党だけではなく首相官邸も相当動き、与党側とうまくリンクしていたと思います。

菅 村山首相のもとで、五十嵐広三<sup>21</sup>さんが官房長官でしたね。特にいま言われた2つのことは、村山さんも社労族の古手ですから、村山さん自身の発想もあつたし、自民党とさきがけには社会党を少し応援しようという気分もあつたから、いい関係だったと思うんです。自民党にしてみれば細川、羽田政権のときに小沢さんが社会党をどんどん追い詰めて、政

(21) (1926) 旭川商業高卒。旭川市長を務め「アイデア市長」として知られた。80年、社会党から衆院選初当選。以後、当選5回。細川政権で建設相、村山政権で官房長官を務めた。

権が崩壊したことが他山の石になったわけです。村山首相は首相就任直後の国会で自衛隊を認め、日米安保を認めるといふかなり苦渋の選択をしましたから、気分的に社会党をそれ以上追い詰めたくなかったでしょうね。

——自社と政権の政策決定システムは民主的でおもしろいと思いますが、村山政権以後の連立政権では姿が変わりましたね。

菅 多少我田引水かもしれないけど、私と加藤さんは懇意だったし、そういうシステムをつくるときもいろいろ相談しながらやった。「3・2・1」の仕組みがよく機能したんです。不満が出たのは大臣経験者や当選5回、6回くらいの議員からでしたね。というのもこのシステムだと彼らの出番がなかなかないわけです。さきがけから1期生が出てくるところに10期生の人が同列に座るのは、自民党からするとなかなかしんどいですね。結果的に自民党から出てくる議員も若手が多くなる。それで中堅、特にベテラン勢からは「俺たちは何もすることがない」という不満が出たんですね。そこをそれなりにちゃんと抑えてくれたのが、当時の自民党執行部だったんです。

——1955年に結党して以来、自民党は村山政権時代が最も禁欲的だったでしょうね。菅 そうかもしれませんね。

### 燃え尽きた村山首相

——政権維持のために自民党が欲望を抑えたおもしろい時代だったと思います。ところが、96年1月、村山さんが突然退陣<sup>22</sup>して橋本政権が誕生しました。その結果、禁欲的だった自民党は次第に変質していきました。村山さんの退陣前後は何が起きていたんですか。

菅 95年1月に阪神・淡路大震災があつて、村山さんが辞めたのはその翌年の1月です。ある意味で村山さんは燃え尽きちゃったんですよ。疲れちゃったんです。これは若干あと知恵ですが、村山さんが自民党に政権を譲ったのは大間違いだったと思うんです。本来なら村山さんは、次の展望を持つて自分の手で衆院を解散すべきだったんです。村山さんは北海道知事だった横路孝弘<sup>23</sup>さんあたりを後継にして、どこかの時点で解散して、今度は自民党に頼るかどうかは別として「自分たちが主導の政権をつくるんだ」と打って出なけれ

(22) 村山首相は96年1月5日昼、首相官邸で開かれた連立与党3党の党首・幹事長・書記長会談で辞意を表明した。同日午後の記者会見で辞任の理由について「新しい年に人心を一新して、さらに日本の景気の足取りを確実なものにし、内外の諸問題に積極的に取り組んでもらいたい」「節目の年の歴史的な役割を自分なりに考え、力の限界を出し尽くした」などと述べた。

(23) (1941) 東大卒。弁護士。69年、社会党から衆院選初当選。以後、当選9回。この間、83年から北海道知事を3期務めた。民主党副代表、衆院副議長などを務めた。

ばいけなかったんですよ。

私の発想にはヨーロッパ型社民政党というのが根っこにあります。社会党解体論者ではあるけれども、単なる解体ではなくて解体・再生論者ですから、社会党的なるものが一切なくていいというわけではありません。そういうところが1つのベースになって、もうちょっとリベラルな、保守的なものも含めた、ロシア型や中国型の社会主義ではない、ヨーロッパ型の社会民主主義政党というものをイメージしていたわけです。もちろん私自身は「社会主義」という言葉を使ったことはありませんが、いちばんオーソドックスな流れがあり得るとしたら、そういう流れだったと思っていました。

ところが社会党には次の展望に対する戦略性がないから、村山さんは単に「辞めます。お世話になりました。今度は自民党で」と言っちゃったわけです。そこに社会党がやがて消えていく必然性があるわけです。とにかく戦略ゼロでしたからね。

——村山さんが突然退陣したとき、さきがけはどうしようとしたのですか。

菅 村山さんが辞めたころ、すでに次の選挙に向けた政界再編問題がくすぶっていました。さきがけの中でもしょっちゅう議論していました。村山さんの退陣を受けて、3党間で政権協賛がありました<sup>24</sup>。後継の総理は自民党の橋本さんで決まっていますが、新しい3党合意をつくろうということで、3日間ぐらいい夜を徹してやりました。さきがけは政府

系金融機関の問題なんかで世間的にやや翳りを見せていたものですから、もう1回、さきがけの姿勢を鮮明にさせようということで、住宅金融専門会社（住専）の不良債権処理を含めた金融の問題と、被害エイズの問題など3項目にしぼって、「これでダメなら離脱も覚悟してやろう」という態度で3党協議に臨みました。

そして合意文書の中にはっきりと被害エイズ問題については「原因究明と責任追及」という言葉が入ったのです。これに対してはものすごい抵抗がありました。厚生省は私のところに来てダメだから自民党に頼み込んだ。彼らは「原因究明と責任追及」を盛り込まれるのがいやだったんですよ。その代わりに「気の毒な人たちを助けます」という趣旨の文章にしようとした。とにかく自分たちに責任はないと思っていたわけです。血友病患者

(24) 橋本政権樹立に向けて自社さ3党は96年1月7日に、新しい政策合意をまとめた。重点政策として、住専問題の処理と金融行政の見直し、経済構造改革、財政運営の見直し、沖縄米軍基地対策などとともに、被害エイズ問題の責任追及や被害者救済も盛り込まれた。

(25) 住専ローン専門のノンバンク「住宅金融専門会社」がバブル経済崩壊とともに不良債権を抱え経営が行き詰まった問題。国内には8社あり、都市銀行や農林中央金庫などが出資母体。95年末、村山首相が農協系金融機関を救済するため6850億円の公的資金を投入することを打ち出し、国会審議が紛糾した。

(26) エイズウイルスに汚染された血液製剤で多くの人がエイズに感染した問題。日本の製剤は感染率の高いアメリカでの売血を原料にしたうえ、加熱製剤化が85年まで遅れたため、血友病患者約50000人のうちの4割に当たる2000人が感染し、6000人を超える死者が出たとされている。

が血液製剤でエイズに感染したことは当時はわからなかったとして、「患者のみなさんは気の毒だから救済措置をとる」というような言葉はいくらでも書くんです。だけど「責任追及」とか「原因究明」とかいうことは絶対に受け入れようとしません。しかし、私は徹底的に主張して合意に盛り込みました。そして、橋本政権が誕生しました。

### 厚相に就任

——その菅さんが橋本内閣で奇しくも厚生大臣として入閣したわけですね。

菅 私は自分が厚生大臣になるとはまったく思ってなかった。私はそのときで5期生でしたけど、さきがけの中の序列でいうと、いちばん上が武村さんで、次に田中さんや園田博之さん、鳩山由紀夫さんから当選回数には私より少ないが、もともとのオリジナルメンバーがたくさんおられましたからね。

橋本政権発足で、さきがけからは2人の閣僚を出すことが3党の合意で決まっていたんです。武村さんは今回はいっぺん閣僚を引くという話になって、まず田中秀征さんの入閣が決まった。あと1人ということで、武村さんや田中さん、園田さんらが相談したんです。ようね。「菅君、どうか」と言われて、「大変ありがたい話ですが、私でいいんですか?」と答えましたが、結局、私になったんです。そこは百パーセント、武村さんや田中さん、

園田さんたちオリジナルメンバーが相談して決めたことだったので、私は今でもこの人たちに足を向けて寝られないですね。

経済企画庁長官として入閣した田中さんはもともと経企庁が好きだった。宮澤内閣のころから「自分は経企庁長官をやりたい」と言っていましたね。私も「君ほどのポストがいいのか」と聞かれたことがあります。私が長く社会労働委員会にいましたから厚生大臣もいいが、土地問題にも長年取り組んできたので国土庁長官もいい。また行政改革もやっていたから総務庁長官というのもある。つまり、必ずしも「これでなきゃいかん」と言ったわけではないんです。社会党から「岩垂寿喜男<sup>7</sup>さんを厚生大臣に」という声も出ていました。組閣直前に武村さんから「厚生大臣で話がついたから」と電話をもらったんですが、そのニュースがテレビでなかなか流れないんですよ。ひょっとしてひっくり返っちゃいけないだろうかなどと心配しました。首相官邸に行くと村山さんと橋本さん、武村さん、そして、加藤さんもいたかな。そして、「厚生大臣に」と言われて、「ありがとうございます」と言ったんです。

(27) (192912001) 中大卒。総評企画部長などを経て72年に社会党から衆院選初当選。以後、当選8回。最左派の理論家。橋本内閣で環境庁長官。

——なぜ、菅さんを厚生大臣にということになったのですか。

菅 あとで裏話を聞いてみると、武村さんが「田中秀征さんは自分の希望で経企庁長官をやる。さきがけから1人は長官ポストとなった。だからもう1人は大臣がいい」と言ったというんです(笑い)。そして、武村さんが「厚生大臣ならいいだろう」と言ったら、「それでいいよ」と言われたらしい。はじめから「菅を厚生大臣に」という名前が出ていたら、実現していなかったかもしれませんね。

——菅さんが3党合意をつくるプロセスで薬害エイズ問題に関してずいぶん暴れていたのに、橋本さんはよく「厚生大臣は菅さんでいいよ」と言いましたね。特に橋本さんは社労族の代表的な政治家ですから厚生省に天敵を送り込むような人事は避けたいところでしよう。

菅 私と橋本さんの感覚には似ているところがあるんですよ。私が厚生大臣になると橋本さんはときどき「自分も薬害のスモンの問題で苦労したことがあるんだ」などと経験を話してくれました。確かに橋本さんは政治家としては社労族のドンだけど、相手が社労族かどうかというようなことだけで「こいつはいい。あいつは悪い」というような考え方はしていなかったのかもしれないね。

それと、いちばん大きい背景は連立政権だということですね。連立政権において閣僚の数というのはある種の権利なんです。村山政権発足のときは首相が社会党ですから大蔵大臣と外務大臣を自民とさきがけで分け合おうということになって、河野さんが外務大臣、武村さんが大蔵大臣になった。ところが、自民党総裁選があつた95年9月、河野さんが外国を訪問していた間に、橋本さんに党内を固められてしまい河野さんは総裁選出馬断念に追い込まれるということがありました。逆に大蔵大臣の武村さんはどんどん官僚に引きずり込まれた。もしも武村さんが外務大臣だったらもっとカッコよくやれたかもしれないと言われた。だから、後になって「外相と蔵相は逆のほうがよかつたかもしれない」というような冗談が出ました。

それはともかく、さきがけの閣僚ポストは2つということが先に決まるわけです。具体的にどのポストにするかという段階になって、他の党とバッティングすることはあるにしても、連立維持が大事ですから自民党や社会党には「さきがけの要求をなるべく聞こう」という空気があるわけです。だから橋本政権発足のときは、田中さんの経企庁長官もすんなり決まりましたし、武村さんが「菅君を厚生大臣に」と言ったら、それもすつと決まったのです。組閣の過程でドロドロしたやりとりがあつたということは聞いてません。

——菅さんはもちろん、厚生大臣就任を喜んで受け入れたんですか。

菅 親しい3人が私の入閣に反対したんですよ。1人が雑誌「インサイダー」編集長の高

野孟さん。「自民党に取り込まれるのか。もし入閣したら絶交だ」というファクスを送ってきました。もう1人は私の仲間で都議会議員だった池田敦子さん。やはり「自民党に取り込まれるだけだ」と言ってきたのです。そして、3人目が妻の菅伸子という人間でしてね（笑い）。「あなたがこんな政権で大臣なんかになったら、結局は菅も単なる大臣病だったんじゃないかと言われて、次の選挙で落ちるわよ。どうせ大臣になったって何もできないんだから、やめなさいよ」と言うのです。

——入閣すると、生活も仕事もガラッと変わるでしょうね。

菅 あとから考えてみると、勝負は初日なんですよ。組閣のときに首相官邸に呼び出されて、橋本首相から厚生大臣をやってくれと言われて総理の部屋から出るでしょう。すると、私の横にすつと人が近づいてくるんです。だれかなと顔を見ると、厚生省の官房長なんです。おめでどうございませう。ところで秘書官についてはだれがいいかお考えがありますか」と聞いてくるから、「いや、まだ考えてない」と言ったら、「こういう人間がいます」と言って経歴書を出すわけです。なかなか立派な経歴なんですよ。「しっかりと人ならいいけど」と言ったら、「すでにここに連れて来られています」と言うわけですよ（笑い）。とにかくそのときはだれにするか決まっていなくて、ポツンと1人なんです。

そして、次は記者会見です。あれは最悪です。首相官邸に呼び込まれ大臣ポストが決まった直後で、まだ何も用意していないときに記者会見しなければならぬのです。官房長は「今から記者会見です。よろしければこれを参考にしてください」と言って紙を渡してくれる。この段階から官僚による大臣コントロールが始まるのです。そこにはちゃんと書いてあるわけです。「ただいま厚生大臣を拜命しました菅直人です……」と、読み上げると立派に記者会見ができるようになっていのです。「さすがに「菅直人」という部分はあとから書き加えたみだつた」と、ときどきおもしろく話しているんです（笑い）。つまり会見の虎の巻ができていくわけです。官房長に渡されて、目を通してみたら全部できあがっているわけです。薬害エイズ問題についても触れていて「患者が気の毒だから救済しなければならぬ」と書いてあるけど、もちろん間違っても厚生省にとって都合の悪い「責任」や「原因」には触れていませんよ。だから私は「ああそうですか」と言って受け取ってポケットに入れた。記者会見でそれを読み上げることにはせず、自分なりに整理したポイントを話した。記者会見が終わるともう夜でした。

午後9時から、皇居で認証式があり、その後、「役所に1回入ってください」と言われ

(28) (1944) 早大卒。通信社、広告会社勤務の後、フリージャーナリストに転身し情報誌「インサイダー」を創刊。

たので厚生省に行くと、局長さんたちがいて女性局長から花束をいただいた。そのとき私はすごく違和感を持ったんです。というのも「おめでとうございます」と言われたんですね。私の仲間や応援団が「菅さん、大臣になっておめでとう」と言うのならわかりますよ。しかし、例えば私が巨人軍の監督に就任したら、選手がやってきて「おめでとうございます」と言うかなと思っただけです。私は彼らの監督役として来たわけですから「お世話になります」と言うのならわかりますが、「おめでとうございます」と言うのはピンと来なかったんです。

翌日は朝一番に幹部職員が講堂に集まって、前大臣との引き継ぎであいさつをしました。前大臣が「皆さんのおかげで大過なく終わりました」と言いました。「大過なくか。私がやめるときは間違っても『大過なく』なんて言わないだろうな」と思いながら聞いていました（笑い）。その人は社会党の人で、しっかりしたいいい人でしたけど、そういう人でも「大過なく」なんです。

そして初日から3日間、終日、レクチャーですよ。政務の秘書官がまだ決まっています。なので、大臣室に官房長と事務次官がいて、そこに部署別に次々と幹部がやってくるわけです。後ろにずらりと並んでいる人を含めると30人ぐらいになるのです。私以外は全員官僚。説明を受けて私が質問すると、「ああです」「こうです」と丁寧に全て完璧に答

えてくれる。それを聞いてみると、こんなややこしいんだったら官僚に任せておかなきゃ仕方がないなと思わせるための洗脳のセレモニーのように思えてきます（笑い）。3日間も続けて新米大臣に「こんな専門的なこと、全部わかるわけがない」と思わせる。そのためセレモニーですね。私は、「ああ、やっているな」と思いながら、半分寝てましたけどね。（笑い）

#### 見つけたエイズ・ファイル

——菅さんが熱心に主張していた薬害エイズ問題については、最初から積極的に取り組んだのですか。

菅 記者会見のときに、当然、薬害エイズのことを聞かれましたから「まず調査のほうから先だ。そのうえで、原因がわかればおのずから責任問題も出てくるだろう」と言いました。そして、最初の日に事務次官の多田宏氏に「省内に薬害エイズ問題の調査プロジェクトチームをつくる」と言ったわけです。そしたら抵抗するわけです。「大臣が知りたいこと

(29) 東大卒、62年に厚生省に入り、援護局長、官房長、保険局長などを経て94年9月から96年7月まで事務次官。退官後は厚生年金基金連合会理事を務めた。

があれば、何でも調べてお知らせしますから、調査プロジェクトチームはなんとか勘弁してください」と言うんです。私は「自分が知りたいから調査チームをつくろうと言っているんじゃない。患者、被害者、国民が、なぜこんなことになったんだ、おかしいじゃないかと思ってるから、その人たちの疑問に答え真相を明らかにするためにやるのだ」と言いました。しかし、彼らは2、3日間、頑張りましたね。最後にやっと事務次官がトツプでしたが、13人ぐらいのメンバーを決めて、ちゃんと発令しましたんですよ。

——後にいろんな資料が出てきましたが、官僚は本気で調査活動をしたのですか？

菅 厚生大臣に就任するしばらく前に、枝野幸男君が薬害エイズ問題に関して質問主意書を2回出してらんです。政府側の答弁書は1回目はそのすくいい加減な返事だった。それで枝野君が「どうすればいいでしょうか」と私に相談してきたから、「こういうときは質問をできるだけ細かくわけて、イエスカノーでしか答えられないようにしたほうがいい。例えば『そのときの薬務局長は誰だったですか』とか、『その人は何をしましたか』という具合だ」と話しました。枝野君は百数十項目の質問主意書を出したんです。ところが答弁書がなかなかでてこないでいるうちに私が大臣になったんです（笑）。そんなばかみたいないことがありました。

薬害エイズ問題について簡単に言えば、この問題は83年ころから表面化していました。

ですから私は調査チームに対して、「その少し前の時期からの歴代の薬務局長、生物製剤課長、課長補佐に対して、次の様な項目で質問する」という質問項目を具体的に自分でワープロを打って文書にして指示しました。質問項目は枝野君の質問主意書と、当時出版されていた薬害エイズに関する本を参考にしました。

実は、ここまでやってはみたものの役所側からはきちんとした答えは出てこないだろうと思っていた。だから答えが出てもなくとも、薬害エイズについていつだれにどういう質問をして、そのときだれがどういう内容の答えをしたのかということ、全部オープンにするつもりだった。さらに一部の報道機関がすでに厚生省が当時、実施した内部調査の資料を報じていたので、「そういうのがあったんですか」とか、「そういうのを全部聞いて答えさせろ」と指示したわけです。そうになると、お役人はなかなか有能なわけですよ。泥棒役のときも有能だけど、お巡りさん役になってもそれなりに有能で、私が言った趣旨に沿って調査表を作成してきて「これでいいですか」「それでいい。手分けして調べてほしい」と言って、十数人を専属に発令して動き出すわけです。

そうしたら2月9日、衆院の予算委員会に出席して大臣席に座っていると、昼休みの直前に秘書官が「昼休みに薬務局長が、ぜひお目にかかりたいと言っている」というメモを渡してきたのです。薬務局長の荒賀泰太氏には朝、会ったばかりなのに何かなと思いが

ら会うと、「実は」と言ってお例のファイルを持ってきたわけです。だれだつてその日の朝、見つけたのであわてて報告にきたのだらうと思いますよ。ところが、後でわかったのですが、すでに2週間ぐらい前に見つかつていて、どうしようか悩んでいたらしい。私はその場でファイルをざっと見たのですが、資料にはかなりいろんなことが書いてありました。私が「コピーはないのか」と聞くと、ちゃんとコピーも用意してあるんですよ。

昼休みは30分ぐらいしかありませんから、私は午後の予算委員会中に全部読んだんです。幸い厚生大臣の席は2列ある大臣席の後ろの列だったし、その日は私に対する質問が1つもなかったから、ずっと資料を読んでいたんです。厚生省は83年ころ、非加熱の血液製剤が危険だという認識をもつて省内に研究班をつくつたのですが、出てきたのはその研究班の議事録のメモなどです。後に帝京大学副学長になった安部英<sup>30</sup>氏が班長でした。それを読むと、当時から血液製剤の危険性がわかつていたんですよ。すさまじいことが書いてあるんです。それで私は予算委員会中に秘書官を呼んで、「委員会が終わつたらすぐ役所に戻るから、多田次官を呼んでおいてくれ。それから夕方、記者会見をする」と指示しました。

——ずいぶん手早い対応ですね。

菅 委員会終了後、役所に戻つたら、見つけたファイルがドツと9冊に増えてるんですよ。最終的に見つけたファイルは30冊にもなりました。この日は金曜日でした。実は金曜日というのがクセモノなんです。この日に記者会見しなければ、土曜、日曜は待たなければならぬ。その間、隠さなきゃいけない。しかも、政治家というのは「金焔火来」と言われるように、月曜は選挙区にいて東京に出てこない人が多い。ですから金曜にわかつたことは土、日、月と3日間、対応できないんですね。だから、役所は重要なことはしばしば金曜に持ってきて、われわれがすぐには動けないようにするのです。このときも官僚はわざわざ金曜を選んで私に知らせたんだと思います。2週間も前に見つかつていたにもかかわらず、何も対応をしていなかったのですからね。もう漫画みたいな話なんです。役所に戻ると、大臣室に業務局長も来ていた。私は、「今日、記者会見する。ただ、今日は重要な資料が見つかったということだけ発表する。固有名詞とかいろんなことが入っているから、それは精査し黒ぬりにしたうえで後日公開する」と言いました。だから私は記者会見には手ぶらで行き、資料発見の事実だけを発表し、「国の責任」という問題もはつき

(30) (1916-2005) 東大卒。帝京大医学部長、副学長などを務めた。血液学が専門で血友病治療の権威と言われた。83年から84年まで厚生省のエイズ対策研究班長を務めた。血友病患者にエイズウイルス感染の危険のある非加熱製剤を投与して死亡させたとして96年に業務上過失致死の疑いで東京地検に逮捕、起訴された。東京地裁で無罪判決を受けたが、東京高裁で公判停止中に死亡し公訴棄却となった。

りしてくるだろう」と述べたのです。

ところが、翌日の新聞を見たら、背表紙に「AIDS」と書いてある「郡司ファイル」と呼ばれる問題のオリジナルのファイルの写真が掲載されているんです。なぜ、そんな写真が出ているのかと聞いたら、記者会見のあと薬務局長が記者に吊るし上げられて「外側だけでもいいから見せる」と言われて抗し切れなくて、外側を見せたんですね。ああいうとき、マスコミは暴力的ですからね。あるということがわかったとたんに、もう隠せないんです。ウワツと来ますから。

——それは当然でしょうね。役所が隠していたわけですからね。

菅 そのあとともファイルがどんどん出てきて、とうとう30冊にもなった。それを厚生省の官僚は「資料はない」とか「何も見つからない」などと平気で言っていたわけですね。私が最初の記者会見で「ファイルが存在する」と発表したことで、そこからは私の力を超えて事態が一気に動き出してだれも止められなくなつた。逆に言うと、調査プロジェクトチームをつくる、つくらないがポイントだったわけです。調査プロジェクトチームをつくる、マスコミは必ず結果を聞きます。それが流れをつくるのです。逆にプロジェクトチームをつくらなければ、結果を聞くチャンスが生まれません。

——官僚機構というのはしたたかなのですね。

菅 話がすこし飛びますけど、96年5月、薬害エイズ問題で多田宏事務次官らの処分を発表した際、同時に厚生省官僚の製薬会社への天下りをほぼ永久的に自粛する方針を打ち出したんです。その方針を記者会見で発表したら、記者から「当面の間というのはどういう期間ですか」という質問が出たんです。私が「どこにそんな言葉があるのか。私の手元の資料にはそんな言葉は入ってない」と言うと、「いえ、ちゃんと資料の中に書いてあります」と言うわけですよ。たしかに、記者に配っている資料には「当面の間」という言葉が入っているんです<sup>31</sup>。この話、すごいでしょう。

——それでどうしたんですか。

菅 もちろん、私は官僚に「これはどうなってるんだ」と言ったら、「ちよつと手違いで」とか「コピーを間違えました」とか言い訳をします。事務次官が大臣室にすっ飛んできて謝ってましたけどね。彼らは明確な意図を持って動いていますから、それぐらいのことは平気でやるんですよ。

(31) この記者会見で菅氏は「みなさんに配布される段階でそういう言葉が入ったのかもしれないが、今後、ずっとそういう方針で行くということです。現行の役職制度が続くかぎり、永久にという理解で結構です」と付け加えた。しかし、96年9月には薬務担当審議官が製薬会社でつくる社団法人に天下りしていたことが判明し、菅氏が「望ましいことではない」と批判。これに対し官僚側は「製薬会社ではなく団体だから、自衛ルルに反しない」と反論した。

先ほどふれました組閣翌日の講堂での最初のあいさつで、私は400人ぐらいの幹部職員を前にして、「皆さんは、国民を行政の対象と見てる人が多いでしょう。そうじゃないんですよ。国民があなた方を雇っているのです」という話をしました。つまり、大臣は厚生省の利益代表じゃなくて、国民が厚生省に送り込んだ国民の代表なんだということを強調したのです。これは私の市民参加論から来ている考え方です。知事や市長もみんな同じです。県民が知事を、市民が市長を役所に送り込むという発想なんです。大臣は制度的には国民と切れているかもしれない。しかし、憲法原理からいうと、国民が国会議員を選んで、国会議員が総理大臣を選んで、総理大臣が厚生大臣を選ぶ。ということは、間接的にせよ国民が私を厚生大臣として厚生省に送り込んでいるわけです。それは、武蔵野市長をわれわれ武蔵野市民が選んで市役所に送り込むのと同じなんです。もちろん役所の責任者としての代表ではあるけど、役所の利益代表ではない。会社の社長という意味の代表とは全然違うんです。

そのことを念頭に置いて「あなた方の仕事は行政の対象として国民を見るのではなくて、あなた方の雇い主だという感覚でやってもらいたい」ということを最初に言ったんです。市民運動時代からの考え方を今度は国政に適用してみようという決意表明ですね。

#### 大臣2カ月で薬害エイズ訴訟が和解へ

――発想の転換を官僚に求めたわけですね。

菅 話が前後しますが、あのころ私は、役所には内緒でこっそり薬害エイズ訴訟の原告と会っていたんです。もちろん役所は私を原告には会わせませんよ。裁判では私は被告です。被告と原告が役所で会うわけにはいかないし、役所はそんなことはなかなか認めないでしょう。しかし、私は原告の人たちに直接会ってもかまわないと思っていました。間を取り持つてくれる国会議員がいたので会ってたんなんです。そして、最終的に和解になった。しかし、厚生省の利益はどうなるのかという観点から見ると、私は利益を損なったわけですよ。だから背任になるかもしれない。しかし、当然そうはならないと思っていました。それがさっき言った意味です。私は厚生省の利益代表ではなくて、国民の利益代表だ。だから、被告である私が原告と会うべきではないという考え方は、論理的にはまったく間違ってるんです。

――とにかく菅さんは薬害エイズ問題では一気に走りました。大臣就任が1月11日で、調査班のチーム結成が23日でした。

菅 23日ですか。けっこう時間かかっていますね。彼らはだいぶ抵抗したなあ。(笑い)

よかったのはファイルが発見されたことだけではなかった。エイズウイルスに感染した血友病患者と家族が国や製薬会社に損害賠償を求めていた訴訟で、東京地裁と大阪地裁が和解勧告をしてくれていたことです。<sup>32</sup> 和解の条件まで全部出てたんです。もしも国が和解を受け入れず裁判を続ければ、これはもう永久裁判になるんです。というのも裁判というのは一人ひとり、いつ感染してどうなったかというのを調べますが、エイズの場合、感染時期がバラバラなんです。早い時期の感染はまだエイズの認定がはっきりしない時代で、これは国などの過失性が低いです。しかし、最後の時期は業務上過失致死容疑で安部英氏（一番の東京地裁で無罪判決、二番の東京高裁で公判停止になり、その後亡くなり公訴棄却）や元生物製剤課長の松村明仁氏（有罪が確定）が逮捕されたように、過失性が非常に高いわけです。未必の故意に近いですからね。そうすると、個々の患者で裁判をしようと差が出るんですよ。それで東京地裁と大阪地裁は全部均一で決着しようとしたのでしょね。だから、全部の患者に一定の救済をやったわけです。

私が大臣になったときはすでに和解勧告が出ていたんですけど、厚生省は自分たちの責任を認めたくないものだから態度をはっきりさせていなかった。しかし、東京地裁と大阪地裁がそこまでやってくれていたのです。3月15日に最終的に和解勧告を受け入れることを決めた。大臣になったのが1月11日ですから、意外に早い決着だったですね。

——確かに早いですね。2月9日の夜に緊急記者会見してファイルの存在を明らかにし、1週間後の16日にエイズ患者2000人と会って謝罪をしています。そして、3月15日の和解勧告受け入れ決定ですから、2カ月間で和解ということですよ。

菅 たしか3月29日が和解の最終的な成立で、東京と大阪で署名したんです。

——一時金は1人当たり4500万円という和解内容でした。

菅 いろんな偶然が重なっているんです。それも大臣になる半年ぐらい前に、中選挙区時代の私の旧選挙区に住んでいた薬害エイズ患者の川田龍平君<sup>34</sup>の会合があって、うちの嫁さんが出席したんです。そこで川田君とお母さんから薬害エイズに感染している話をいろいろ

(32) 訴訟は89年に東京と大阪で起こされ、数次の提訴で原告被害者は合計450人あまりとなった。両訴訟とも96年3月、和解が成立した。和解の内容は患者1人当たり4500万円の一時的支払いや発症前感染者への手当の継続と拡大、発症者健康管理手当の創設などが主な内容だった。和解の対象となった患者は118人。国と製薬会社の費用負担は4対6とした。

(33) (1941) 北海道大医学部卒。75年に厚生省に入り84年から86年まで薬務局生物製剤課長を務め、血液製剤の製造・輸入の承認などの事務を統括した。その後、保健医療局長などを務め96年に退官。同年、薬害エイズ事件で業務上過失致死容疑で逮捕、起訴され08年に有罪が確定した。

(34) (1976) 東京経済大卒。07年、無所属で参院選東京選挙区に初当選。生後6カ月で血友病と診断。投与された輸入血液製剤でエイズウイルスに感染。東京HIV訴訟の原告に加わり95年に実名を公表。その後薬害エイズ問題に取り組んでいる。

ろうかがあったんです。そして、嫁さんがうちに帰ってきて私に急に怒るんです。「最近あなたは税金がどうかという問題をやっているけど、昔は市民運動的に丸山ワクタン問題などに取り組んでいた。こういう問題を全然やらなくなったじゃないの」というわけです。

テーマを掲げた運動というのは、まさに市民運動みたいなどころがあつて、中途半端にはやれないんです。いざやるとなったら腹を据えて取り組まなければならぬ。嫁さんに怒られて私も多少反省して、実はさきがけの中に薬害エイズ問題についてのPTみたいなのをつくったんです。それで枝野君とか荒井君が動くようになったのです。また、私自身もいろんな資料などを読んでたんです。

そういう前哨戦があつたものですから厚生大臣になつた瞬間から何をすべきかという答えは出てるんです。ドラマで言えば、最初に犯人がわかつていて、あとは追い詰めていくだけという筋書きのようなものです。私が就任後に見つけたと言われたファイルの内容は、すでにNHKで報道もされていました。にもかかわらず役所は平気で「そんなものは知りません」と言っていたわけです。確かに就任後の動きは電撃的だと言われるんですが、偶然が重なつてるんです。

最後にもめるかもしれないと思つたのは製薬会社です。バクスターという外資系の企業でした。国内企業は厚生省に弱くから何とかなると思つていましたが、バクスター社は早い段階から加熱製剤をつくつていて「切り替えさせてくれ」と言つたのを、国内メーカーがなかなか加熱製剤をつくるのができないものだから許可しなかつたんです。つまり厚生省は国内企業を守るために加熱製剤の認可を遅らせたわけですね。これはもう最悪なんですよ。安部英氏がやっていたわけですけどね。国内のミドリ十字などの企業が生産できるまで、2年ぐらい待たせてるんです。バクスター社からすれば、「自分たちは早くから替えてくれと要求していたのに、認可が下りないから前のを売っていたんだ。だから自分たちの罪は軽い」と言いそうな雰囲気があつた。もしバクスター社がそんなことを言つたら「あなたの方、危ないことを知つていて売つたんですか？」と言つてやろうと思つて待ちかまえていたわけです（笑い）。しかし、結果的にそこまでケンカ売つてきた人は1人もいなくて、わりとすんなり和解案を受け入れました。

和解案では薬メーカーと厚生省の両方の責任で金を出し合いますから、向こうがオーケーしてくれないとだめだった。外資系企業を全部説得して、国内企業はすんなりOKして、そのうえで東京地裁と大阪地裁へ行つた。最後になつて大阪地裁で原告の1人が「署名しない」と言い出したんです。私は「今後、大臣を辞めようが何しようが、できるだけのことはする」と説得して署名してもらつたんです。

——奥さんの厳しい言葉も含めていろいろ偶然があつたでしょうが、権力の中核で物事を

動かす人がいないかぎり、問題解決はできないものです。菅さんではなく別の人が厚生大臣だったらこんなうまくはいかなかったでしょうね。

菅 和解勧告をすんなり受け入れなかったら、水俣病問題のようにズルズルと時間がかかったうえに、「気の毒だから何とかしましょう」「みたいな形での対応をしていたでしょうね。

——もちろん、刑事事件にも発展していなかったでしょう。

菅 それはまったくそうだと思います。

——ですから、だれが大臣かということとはすごく重要ですね。

菅 重要という次元ではなくて、決定的なんだと思います。

#### 堺市のO157事件とカイワレ騒動

——菅さんの厚生大臣時代は他にもいろんなことがありましたね。なかでも96年夏、大阪府堺市で起きた病原性大腸菌O157による集団感染<sup>35</sup>は大きな話題になりました。

菅 私の大臣時代は薬害エイズ問題が社会的にはいちばん注目されましたが、O157も大変でした。この問題は原因だとされたカイワレ騒動も巻き起こしました。

——大阪のO157の原因はカイワレダイコンではないという説がありますが、真相は何ですか。

菅 あれはカイワレが原因ですね。カイワレの生産業者が国に損害賠償を求めた2件の訴訟は最高裁までいきましたが、04年、国の敗訴が確定しました。国民の注意喚起のために厚生省が原因について発表をすること自体は妥当だとしましたが、不確定な情報を公にして業者に損害を与えたことは違法だったと判断したのです。あの裁判は変なんです。一度として私の意見を聞かなかった。

実はあのあと、2年ほどしてあるデータが見つかったんです。専門家からもらったんですけど、それを見ると原因は輸入されたタネなんです。タネの中にO157の菌が残っていたんです。水耕栽培というのは一種の培養と同じなんです。まったく無菌の中にあるから、ちよつとした菌が入ると一気に増えるんです。そしてカイワレの芯を通って葉っぱに入ったわけですよ。それ以外に考えられないんです。

——当時も言いましたけど、疫学調査というのは単なる蓋然性じゃないんです。8千人の子

(35) 96年7月、大阪府堺市の小学校で起きた集団食中毒事件。患者の児童の検便から腸管出血性大腸菌O157が検出された。患者数は次第に増加し児童、教職員、さらにはその家族ら合計9500人におよび3人が死亡した。原因となった食材について菅厚相は8月、「カイワレと断定できないが可能性も否定できない」と発表した。これに対してカイワレ生産業者が国に対する損害賠償を求める訴訟を起こし、国が2300万円を賠償する判決が確定している。

供たち、ある会社の寮、老人施設という異なる場所にある3つの施設の患者が同じO157の菌に感染しており、いずれも同じDNAだったんです。だから原因食材は同じなんです。その3つのまったく違う場所で同じDNAですから、さらに調べたら共通に食べた食材は特定の農園のカイワレだけだったんです。だからそれ以外にないんです。疫学調査の専門家にちゃんと調べさせたら、疫学だから「100パーセント」という言い方はしませんが、「クロです」と言うんです。それで私は疫学専門家と一緒に記者会見したんです。表現が「99パーセント」だったか何パーセントだったか知りませんが、疫学的に言うとは完全にクロナんです。

——あときはあまりはつきりした説明がなくて「本当にカイワレが原因か」と言われました。

菅 そして、業者から訴えられたんです。こちらは農園を調査したんですが菌は出なかつたんです。だから疫学的に判断したわけです。調査をするのは発病してから2、3週間たつてからでした。その間に農園だつてきれいに消毒してるから何も残ってませんよ。農園の近くに農場がありました。O157は牛などの常在菌ですから、農場の糞が流れてきたのかとも考えたんですよ。さすがにあの当時はタネの中に菌が残ってるということまでわからなかったですからね。

——タネの中に菌がどうして入るんですか。

菅 生長するときに、土から入ったんでしょうね。大腸菌の同様なデータは日本にもあるんです。

——O157は大阪の堺市が爆発的に広がった初のケースではなく、それまでもときどきあったんですね。

菅 ただ、8千人というような大規模なものはないですね。それに堺市の場合、給食でしたから一気に広がったのです。

——この問題で何を重視したのですか。

菅 再発防止と原因究明ですね。再発防止については結果的にそれ以上広がらなくてよかったです。原因究明については、疫学的調査の結果を発表したんですが、薬害エイズほどすつきりはしません。しかし、いちおうそれで解決したわけです。

——その他の問題はいかがでしたか。

菅 多田さんのあと事務次官になったのが岡光序治<sup>36</sup>さんです。私も大臣を2、3年間やつ

(36) 東大卒。63年に厚生省に入り、老人保健福祉部長、薬務局長、官房長、保険局長などを経て96年に事務次官。次官在任中の96年12月、特別養護老人ホームへの補助金支出を巡って便宜を図った業者から6000万円を受け取った取崩容疑で警視庁に逮捕された。

ていたのであれば、次の事務次官をだれにするか自分のオリジナルの発想ができたかもしれないけど、1月に大臣になって間のない7月か8月ごろに事務次官の交代ですよ。後継者となった岡光さんは確かにやり手だった。皆が彼でいいと言うし、与党の連中も「あの人しかないんじゃないか」と言うから、私はあまり口を出さなくて事務次官になっても良かった。ところが、後日、私が厚生大臣を辞めた後ですが、96年12月、イギリスにちょっと調査に行つて向こうで新聞を見たら「岡光逮捕」ですよ（笑い）。ドラマチックなことがいろいろありましたね。

——岡光さんという方は、どんな人でしたか。

菅 なかなか頭のキレがいい人でした。薬害エイズのころは保険局長でした。そして、0157のときに事務次官でした。カイワレ問題のとき私は原因がカイワレであるということを発表すべきだと思った。それで皆に「どうする？」と聞いたら、たしか岡光次官が「ここは発表しましょう」と言うから、「それで行け」と言ったと記憶しています。仕事はできる人でした。

——厚生大臣のときに総選挙になりましたね。

菅 私は96年10月の総選挙は厚生大臣のままでやっただけです。自分で言うのも変ですけど、選挙戦は綱渡りだったんです。あのときは、総選挙の直前に民主党を結党して私が鳩山さ

んと一緒に党首になった。現職の厚生大臣が新しい政党の代表になって、しかもその政党が与党じゃないわけです。つまり私は選挙のとき、与党になるか野党になるかわからない政党の党首だったのです。橋本首相にしてみれば、閣内に与党か野党かわからない政党の党首が閣僚にいるわけです。一方で、衆院が解散されて総選挙が終われば内閣は総辞職です。私は橋本首相に「最後まで閣僚をやらせてもらいたいが、それ以前に辞めろと言われれば辞めます」と言った。結果的に橋本さんは「辞めろ」とは言わなかった。ですから私は厚生大臣のままで選挙をやっただけです。

——閣僚にはいろんな魅力があります。厚生大臣だと医師会や製薬業界など関係団体との関係ができて、政治献金が集まりやすくなりますし、選挙での応援が期待できるようになりますね。菅さんはこの業界とどう接触されましたか。

菅 例えば、私が厚生大臣になって就任パーティーでもやって「おい、ちょっとパーティー券を買ってほしい」と言えば、いくらでも買ってくれますよ。幸い私は大臣の間に一度も資金集めパーティーをやりませんでした。また、私は薬の問題にわりあい早い時期から取り組んでいましたので、製薬メーカーには基本的に触らないようにしてきました。ミドリ十字からも1円の献金もありませんでした。

言い忘れましたけど、薬害エイズ問題はそのあとNIRA（総合研究開発機構）に頼ん

で調査してもらったんです。当時の理事長は星野進保<sup>37</sup>さんでした。「厚生省から多少お金を出します」と言ったら、「いいです。自主研究でやります」と言っ、報告書を出してくれて、それがすごくいい報告書なんですよ。「天下りがものすごく影響している」とか、全部書かれています。代表になってもらったのは、表に名前を出さないでくれと言われたんですが危機管理の柳田邦男<sup>38</sup>さんです。あの方に相談してメンバーを決めました。それがおもしろいんですよ。飛行機事故の専門家とか、必ずしも医療関係者じゃなかった。なんでこんな失敗が途中でとまらなかつたのかということ、いろんな形で2年間ぐらい研究してもらったんです。98年ごろには報告書が出ています。ほんとはその報告書に沿って改革をしなければいけないんですが、選挙、選挙で、必ずしもできてないところがあるんです。

(37) 東大卒。57年に調達庁（経済企画庁の前身）に入り、国土庁計画・調整局長、経企庁調整局長などを経て89年に経企庁事務次官。その後、総合研究開発機構（NIRA）理事長を務めた。

(38) (1936) 東大卒。NHKに入り社会部記者。退職してノンフィクション作家に。著書に「マッハの恐怖」「零戦燃ゆ」など。